

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジア大陸部地域語彙の類型論的研究」

2021 年度第 2 回研究会（通算第 7 回目）報告書

日時：2021 年 12 月 12 日（日）13:30–17:00

場所：オンライン

使用言語：日本語

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」

13:30–15:00 山田敦士（AA 研共同研究員，日本医療大学）

「パラウク・ワ語の語彙」

15:10–16:40 倉部慶太（AA 研所員）

「ジンポー語の語彙類型論的特徴」

16:40–17:00 全体討論

研究会の報告の要旨は以下の通りである。

山田敦士（AA 研共同研究員，日本医療大学）

「パラウク・ワ語の語彙」

パラウク・ワ語は、オーストロアジア語族パラウン語派に属する言語である。本発表では、中国雲南省西南部におけるフィールド調査に基づき、パラウク・ワ語の語彙にみられる (1) 語彙の細分化（または非細分化）の状況、(2) イディオム化の特徴、について報告をおこなった。(1) について、「切断」「洗浄」「摂食」「発話」および「授受」「発声消失」に関する動詞、「親族」「ライフステージ」「色彩」「時間」に関する名詞を取り上げ、検討をおこなった。周辺言語からの借用を多く含む「発話」など、パラウク・ワ語の特徴がみられる語彙体系がある一方で、「切断」「洗浄」や「親族」など地域的または言語横断的に観察される語彙細分化の状況が指摘された。(2) について、主に語彙化にみられる傾向を検討した。今日のパラウク・ワ語では、複合法と類似並列法が生産的な形態法である。複合語の体系を分析する際、類名詞の役割が重要である。これに着目することで話者の体系的認識を分析できる可能性がある。また、類似並列法で結びつく要素同士の対義・類義関係から、民族言語の語彙カテゴリーの体系を推し量ることが可能である。

倉部慶太 (AA 研所員)

「ジンポー語の語彙類型論的特徴」

ジンポー語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する言語である。本発表では、これまでの研究会でたびたび取り上げられてきた語彙・意味領域を中心に、①細分化、②colexification、③知覚・感覚語彙、④親族語彙、⑤翻訳借用などに見られるジンポー語の語彙化のパターンを報告した。①「米」「水」「重い」「貸す」「洗う」「持つ」「切る」などの細分化が認められる。関与する変数として、有生性、対象物、道具、方向、様態、結果物などがある。自動詞と比べて他動詞は参与者がより複雑に関与するため様々な選択制限を考慮に入れる必要がある。② colexification には「火」と「電気」、「肉」と「獲物」、「死ぬ」と「火が消える」、「教える」と「習う」など系統を超えて周辺言語に観察されるパターンが見られる。ビルマ語に観察されず、カチン諸語に共有されるパターンは言語接触の影響を示唆する。「灰」はメトニミーにより広範囲の意味を獲得した語である。③色彩語彙は形態統語的な発達度合いにばらつきがある。「黒い」「白い」「赤い」「緑だ」の4つの動詞がもっとも発達している。触覚・温度語彙は「熱い」と「冷たい」で異なる semantic map を示す。感覚モダリティ間の意味拡張として、「におう」>「味わう」、「聞こえる」>「におう」または「感じる」、「聴く」>「味わう」など通言語的に見られるパターンが観察される。共感覚メタファーは日英語ほど発達していないが、smell-to-sight、touch-to-sound、taste-to-smell、touch-to-taste その他のパターンが観察される。④カチン諸語の親族語彙は、個別の形式は異なるものの、それらが配置される体系は一致を示す。⑤翻訳借用には、ビルマ語とカチン諸語に共通のパターン、カチン諸語間で共通のパターンがあり、後者は言語接触の影響を示唆する。

(発表要旨は発表者による)